

やさしいことをふかく
加古陽

二〇一八年十月、東京・中野サンプラザでの「岩田正を偲ぶ会」で印象に残ったのは、小島ゆかりの言葉だった。「とにかく褒めてくれました。俵万智さんの『サラダ記念日』の年に第一歌集を出しましたが、自分の歌が古くさく感じ、悲しかった。その時、岩田さんと会ったら『あなたはいいよ、あなたはいいよ』と言ってくれた。私も『いいのかもしれない』と…。人としての愛情をかけてくださいました」

岩田に褒められた第一歌集『水陽炎』から三十年余り。今や短歌界を代表する一人となった小島の十四冊目の歌集『六六魚』(本阿弥書店)は、一八年度の短歌研究賞受賞作「砂いろの陽ざし」二十首を含む四百四十八首の充実した内容となった。

小島の歌は、作家の故井上ひさしの言葉に通じるものがある。

「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかに(後略)。新聞記者への戒めにも引用される言葉だが、芸術至上主義的な考えへのこだわりから、しばしば読者が置いてきぼりにされがちな現代短歌の世界でも、傾聴に値する。小島はまさに、一貫して「やさしいことをふかく」を体現してきた。

だが、小島の歌は凡百の短歌愛好者のものとは、やはり違う。〈かき抱くやうに大気をひきよせて風に乗りたし腋わきふくよかに〉。冒頭の牧水をモチーフにした連作にあるこの歌に難しい言葉はないが、鳥の飛び方を的確に描き、歌人の水準を表している。特に第五句の〈腋わきふくよかに〉はなかなか言えるものではない。

〈この町にまた冬が来て葉牡丹は遠心力をたくはえてをり〉の葉牡丹の遠心力、〈ひひらぎの棘ある葉群ひかりつつ一葉も空を傷つくるなし〉の葉の棘が空を傷つけないこと、〈へもみあへる魚群のごとく降りず東京メトロの深夜のホーム〉の魚群のたとえ、これらもそれぞれ平易な表現の中で光る発見である。

この歌は、詩になっているか。それを確かめる品質管理の眼があるから、孫の歌も甘くならない。〈赤子まだ知らずこの世の底知れぬ泥のけむりに棲む六六魚〉よく肥えて赤子ねむり窓辺より匍匐前進してくるひかり×われに似る小さき人よ今日の日を君は忘れよわれは忘れず〉といった歌が、それを示している。

もう一つの小島の美質は、向日性である。日常は当然のごとく悲しみや苦しみを含めて過ぎてゆく。だが小島は、自己戯画化はしても、自己憐憫や苦しみの吐露には抑制的である。〈来よと言ひ早く帰れと言ふ母よくたびもわれを鳥影よぎる〉など「鳥影」の一連では事態の深刻さが示唆されるが、別の連作では〈くりかへしどこへ行くかと聞く母よ大丈夫、銀河までは行かない〉と、ユーモアで持ちこたえる。読後感の良さは、そんなところで支えられているのだろう。全般にさらっと詠まれていようである。実